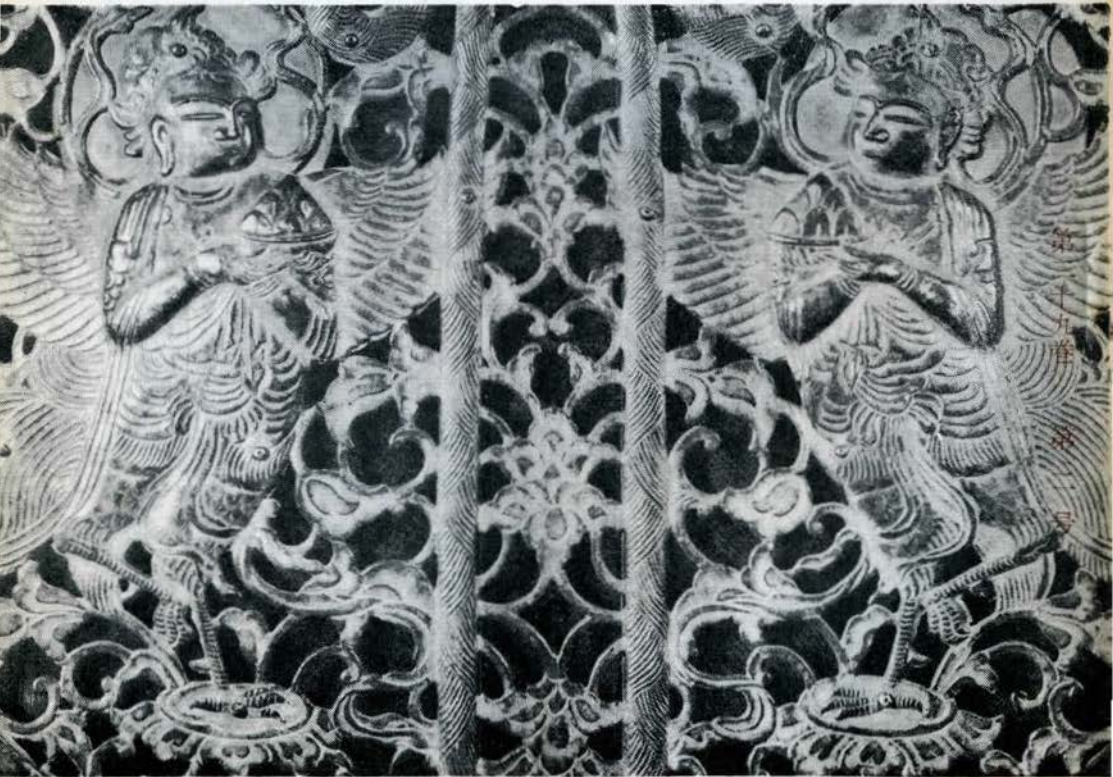


浄土

二月号

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授受承認雜誌第三五二号)
昭和三十八年一月二十五日 印刷 昭和三十八年二月一日發行



法然上人鑽仰会

新版ひめくり

心のあゆみ

A判

価格 七〇円 十 二〇円

体裁 タテ 30CM ヨコ 10CM

割引 一〇部以上 一割 五〇部以上 一・五割引

送料 実費 百部以上 二割 引

(百部以上より無し)

修養ひめくり

B判

価格 一〇〇円 十 四〇円

(一〇部以上より割引あり)

法然上人鑽仰会

東京都千代田区
飯田町1の21

振替 東京82187 電話 (332) 5944

浄土トラクト

大正大学教授・文博 佐藤賢順 著

再版

信仰へのみちびき

B 六版・十六頁

定価十五円 十 十円

目次

1、大慈悲の仏教
2、知性を超えて
3、美的情感を超えて
4、本願の不思議にて

5、すべてを包む愛
6、人生は信ずる心から
お導びきのままに

月影抄

村瀬秀雄 著

御法語の栞

B 六版・十六頁
定価十五円 十 十円

目次

1、上人のご日常(われ聖教を見ざる日なし)
2、浄土宗の意義(われ浄土宗をたつる心は)
3、道を求む(かくの如くして昨日もいたづらに暮れぬ)
4、決定の信(我は鳥帽子もきぬ法然房也)
5、弥陀名号の功德(無礙光とは)
6、念佛のすがた(つみは十惡五逆のものも)
7、念仏を勧める(不軽大士の杖木瓦石を)
8、あとがき

申込先

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

東京都千代田区飯田町一ノ二一

浄土

二 月 号

本願のむなしからず、称念せば必ず生るべしと思より外には、全心にかくる事なし。

法然上人御法語



—◇目 次◇—

表紙 金銅華蓋(宮城・中尊寺)

お涅槃の日に想う	藤堂 恭俊 (2)
節 分	安井 香山 (6)
三分間 法 話 観音さま	藤井 実応 (10)
教育シリーズ 精神薄弱児教育	岡本 信教 (12)
三部経の再発見(二)	須藤 隆仙 (16)
紀行文 アメリカ旅行⑧	佐藤 治子 (20)
扉の御法語	(27)
極楽浄土	(32)
表紙の写真	(7)

經典入門・無量寿経の話(一)

本願ということ

香月 乗光 (28)

編集後記

(33)

お涅槃の日に想う

紀元前四八三年、現今のネパール地方のカピラ城の王子として、この世に生を享け給うた大聖釈迦牟尼世尊は、因苦六年にわたるご修行の暁、彼に先だつてこの地球上に生活していた数限りない人たちの誰もが、いまだかつて自覚し得なかつた未顕の真実を開顕し、仏教をひらき給うたのである。この釈尊お独りの自覚、めざめは当時の人は言うに及ばず、その後二千五百年をけみする今日にいたるまで、大きな指導力をもつて今古の人間の生命にひかりとうるおいとを与え來つた。言うならば、釈尊が自覚し給うたその内容である真実そのものは時間と空間と民族との差別をこえて普遍的なものであり、永遠のものであるにかかわらず、それを自覚し給うた

藤堂恭俊

(仏教大学教授)



釈尊その人の肉の身は、八十歳をもって生者必滅なる無常の法則というか、この世の定めるところに従つて、クシナーラの沙羅双樹のもとに、頭北面西ねむるが如くこの地球上からその温容を消し給うたのである。如月なかの五日こそ、人類の師釈尊がこの世を去り給うた淋しみの日である。私たち仏教徒はこの日をお涅槃の日と称し、仏教寺院にあっては涅槃図をかがけておごそかに涅槃会を修し、今はいままぬ大師釈尊の広大な慈恩を敬慕申し上げるわけである。

×

×

×

近ごろ日本にあつても、若い世代の人たちの間で、たがいに誕生日を祝福しあう風習が一般化してきた。それら若い人

たちは、仏教ではなぜ誕生日を祝わずに、亡き人のご命日をとるあげるのか、と疑問をもつ。今は亡き血縁の方々、世のため、人のためにつくされた恩人の霊をなぐさめ、やすらかであるように追善のご回向を申し上げることもさることながら、今一つ亡き人の生前の行跡を今日の私たちがかえりみて、そこから学びとるべきものを学びとることこそ、故人に對する最大の敬意であり、かつ故人を現在に活かす道であることを忘れてはならない。誕生したばかりの人間は内容的に、人生における未知数の人であるのに反し、亡き人は内容的に、実らずべきものを実らした人である。亡き人の人生経験、その業績は必ずや、なにか私たちに教えるものを持ってゐるはずである。温古知新ということばもあるが、亡き人のご命日に、亡き方々を偲ぶということは、その意味で私たちの人生の歩みに對する一つ反省の資ともなりうる。まして釈尊のような、人類の師とあがめられる大聖の温容を偲び、悲智円満な、そのご人格を敬慕申し上げる涅槃会の意義は、より一層深いと言わなければならない。

×

×

×

人の死をいたむ心は万人に共通的である。とりわけ肉親のもの、深いつながりのあるものに対しては一層深い。この眼で釈尊の温容を見たてまつり、この耳で説法下なる釈尊のお

声を聴聞し、この両手で釈尊のみ足を洗い申し上げた。そうした釈尊につらなるお弟子たちが、大師のお涅槃をいかにいたんだが想像にかたくない。しかし時と処とをへだて、民族をことにする、いいかえれば釈尊の温容にも、説法にも浴したことの無い異国の人、中国の仏教徒たちの間にあつても、「釈尊は今現にこの世にましますぬ」と言うことについて、深いなげきをいだいていた。この実感は釈尊の直弟子たちのそれに匹敵するものである。

東晋時代のシナ仏教界の偉大な指導者釈道安(312—385)は、たくさんな經典に序文を書いているが、そのなかで、「私は釈尊がお亡くなりになったあと、この世に生を享けたため、釈尊にお値いしたくとも、そのすべのない」ことを、いたく憂るとともに、釈尊がましました聖邦インドに生れず、聖邦でない異国、辺国である中国に生れたという意識を深めている。彼のこのような精神的な時間的空間的隔絶感は、さらにインドと中国とをへだてている広大な沙漠、深い緑海におおわれた大山脈と言った自然地理的な距離感、隔絶感によって一層強められた。又彼は「釈尊の金口のご説法を拝聴し得ない私たちは、それにかわる經典に釈尊の教えを学びとろうとするけれども、悲しいかな經典が完備されていない」という不足を痛感するとともに、ひいては釈尊の教え對する疑

義を解決する根本資料としての經典の未完に危惧のおもいを深めたことである。時として彼はこの地上におでまし下さる弥勒仏にその解決を期待したことであったが、遙かに遠い將來にしかこの世におでましにならないことに気づく時、彼は悲痛を一層深めたことであった。その後、時代がくだって經典採訪の旅や仏跡巡拝が企圖されたこともまた、釈道安以來、中国の仏教徒が心にもった隔絶感の上に行われたことである。

ただ独りの釈尊ではあるが、その自覺の深さ、めざめのあかるさがありにも偉大であったため、その人格と豊かな宗教體驗とに敬慕のおもいをあらわさずにはいられない彼らの純情さは、仏教にいのちをかけてとりくみ、教えを文字通り自分の體驗の事実としようとする人たちにとって、釈尊の涅槃はいか程マイナスであったかを、この上なく示すものである。これら中国の古聖の心情をかえりみ、私たち今日の仏教徒にして、釈尊を敬慕申し上げるいか程の心情をもちあわしているかを反省する時、本当にお恥しくも、面目なさを禁じ得ない一人であることに懺悔せずにはいられない。

×

×

×

人類の師、大聖釈尊がお亡くなりになって、この世にましまさないとすることが、か程まで強く人の心を動かすからに

は、そこになにか深い道理がなければならぬと思う。單なる淋しいと言う感情をはるかにこえた、なにものが敬慕のおもいを一層かりたてることに注目したい。

中国は初唐、北シナの地域で浄土教の宣教に力をいたされた道綽禪師(Daoshuo)は、「大聖を去ること遙遠」と、その著『安樂集』に記している。この道綽のことばは彼の心根を表現したものであり、釈道安等の先徳たちの心情に直結するものである。仏教徒にして、仏教をおひらき下さった釈尊に敬慕のおもいをかよわすことは当然のことであるが、この道綽のことばにはそれ以上のものを感じとることができ

る。

未顕の眞実を開顯し給うという、豊かな宗教體驗にみちみちられる釈尊は、そこから発する人格のひかりによって、人々たちを嵩高なムードのなかに温かくつつんでしまったことである。世俗の生活のなかで、愛欲と利益をむさぼり、鬭争と愚痴とにあけくれる多くの人々たち、あるいは確固たる信念もなく、宗教體驗の尊さをもたない人々たち、これらの人々たちの多くは、釈尊の豊かな宗教體驗にねざす人格のひかりに魅せられ、そのとりことなり、そこに安住の地を求めざるを得なかったであろう。かかる強力な人をひきつけずにはおかぬ底なしの人格のひかりのなかで、その温容に接し、その説法

を聴聞し、よきに育つよう念じ下さるその念力に浴しつつ、
 仏道の実践につとめ勵んでこそ、さとり自覺とめざめの生
 活をもたらし得たのである。釈尊の深い宗教体験にもとづ
 く、その身と口と心の三業はすべて説法ならざるものなく、
 よき修行の場を形成したことであつた。いな釈尊のまします
 ところすべて仏土であつて、仏土における修行の効果とその
 確率は実にさだかであつたわけである。このことはあたか
 も、闇夜にひかりを得て、そのひかりのなかで行動すること
 の容易さに等しい。「大聖を去ること遙遠」とは、そうした
 釈尊の人格のひかりとこの上なき修行の場とを持ち得ないも
 のが、ひとく心にもつ悲痛さ叫びである。末法時とはそう言
 う意識を外にして成立つものではない。末法時はよくくらさ
 として表現されるが、それは釈尊の人格のひかりの欠如を意
 味する。

この地上の人は釈尊の涅槃を機として、その偉大なひかり
 を失ひ、この上ない修行の場と安住の地を失つた。しかし人
 間は私たちを強引にひっぱって頂く偉大な人格身のおみちび
 きを得なくては、到底身心のやすらぎを得ない。それ程私た
 ち人間は弱いのである。釈尊のお説き下さった教法は現存
 していても、また多くの学者によつて、それがいかに正確に
 概念的に整理、理解されようと、人独りが教法をみずからの

上にいかし、法が人にいきるといふことには到底及ばない。
 釈尊のお涅槃の日にあつて、教法をみずからの体験の事実
 とし、少しでも教法が人に生き、人も教法とともに生命をも
 つよう努めることを、しかとお誓ひ申し上げたいと思う。

◆ 浄土トラクト ◆

葵 ぐ さ

— 御法語の契り(その二) —

村瀬 秀雄 著

目 次

- 一、自身は凡夫なり(わが身わろして)……………一
- 二、漫心は悪魔に同じ(わがちからにて往
生する事ならば)……………四
- 三、念仏に差別なし(あの阿波介も)……………六
- 四、罪人ながら往生す(罪人は罪人ながら)…………八
- 五、生涯弛まむ努力(ある時の給はく、あ
はれ此度)……………十
- 六、念仏のご利益(およそ五種の嘉譽を)…………十二
- 七、学生と念仏(学生骨となりて)……………十四
- 八、あとがき……………十六



節分

安居 香山

(大正大学講師)

小さい時から、各地を転々としてきた私であるが、不幸にして、節分について深い印象に残るものを持っていない。地方によって、節分にぎやかに、そして古式豊かにやる所もあるようであるが、それらしいものに出くわしたこともない。勿論それは、私が特にそうした事に興味を持たず、又見物をしてみようという気も無かった為で、案外、身近かに、そうしたものは、あったのかも知れない。いずれにしても、さて節分について何か書いてみようとしても、一向面白い話が無いのは、遺憾千万である。

ただ、小学生の頃、吉田山の節分を一度だ

け見に行った記憶がある。何でも大変な人出で、昔の京大、三高の間にあるあの広くて長い吉田神社の参道も、山上の社に通ずる道も人で一杯であったことが印象に残っている。そして、両側には店が一杯ならび、子供心に欲しい物が一杯あるのを、見て廻っては、時間のたつのも忘れ、帰りも随分遅くなったと記憶している。

しかし、肝心の節分の神事が、どの様に行われていたかは記憶が余らないのは、残念である。何でも、山上の社から、赤や青の鬼面をつけた男が、たい松を持って、参詣の人をかき分け、山を走り降りて行ったのを、こわごわ、人垣の後から見ていたようだ。多分こ

の鬼達は、年男の撒く豆に、追い散らされて逃げてきたのであろうが、その前後にどんな神事が行われたのかは、一向知らない。むしろ私は、店に並ぶさまざまな物や、人山の中で得意げに景気よくバナナを売っている男達に興味を持っていたようだ。

この頃になっても、一向こうした節分行事に特に興味も無いので、見に行った事もない。ただ、テレビやラジオなどで、よくまあ人が集るものだと、感心している程度である。且つて、NHKにいた友人が、成田山の節分の実況放送をやったとき、マイクを持って高い台に乗っていたのはよいが、人波に押されてその台が倒れ、本人はマイクを持ったままひっくり返り、放送がメチャクチャになった話を聞いて、大笑いをした事があった。有名な寺や神社での節分は、去る年の厄を払い来る年の福を求めてやってくる善男善女で大変な人出らしい。科学万能の世のように言われるこの頃でも、変らぬは人の心であるといくづく考えさせられる。

節分前ともなると、大寺や、神社の前には、デカデカとその年の年男の名前が貼り出

されている。顔見世興行の看板でも見るような気持ちで、しばらく立ち止って見てみるこ

とがある。有名、無名の政財界人の中に混って、大鷗や柏戸の名があったり、長島や張本、或は坂本九や裕次郎が出ていたり、なかなか賑やかである。中には、女優の名までが、並んでいたりする。年男とは、その年の干支に当る男の客であるが、もうここまできると古式豊かなくともあったものでない。とも角、賑やかで、人が多く集ってくればよい

表紙の写真

国書・金銅華蓋（中尊寺金色堂）平安時代

芸術味溢れる仏堂を拝観した場合、ただその偉大さ、すばらしさに圧倒されて一つ一つの細いものに眼を配ることすら忘れてしまふ。二度、三度と回を重ねることに今迄気づかなかつたすぐれた小品が大きく眼前に現われてくる。しかも、始めからそこになければならないようにひっそりと納まっている。中尊寺金色堂の絢爛たる堂内は人々の眼を見張る。しかし、そのかたすみに金銅の華蓋のあ

わけて、まさに節分興行はなやかという所である。

二

節分とは一体いつ頃から始まったのであろうか。少し調べてみた所、なんと中国の、二千年も前の漢の時代までさかのぼり得ると知って、聊か、驚いた。なんでもその頃、「赤丸五穀」をまいて立春の儀としたらしい。

私が、今研究しているものに、緯書というものがある。前漢末から後漢にかけて、即ち

することはまず知る人として多くはない。一面にすかしほりが施され、左右に迦陵頻伽（あやうらふ）を浮出させ、全体に毛彫りで肉の高低が付けられている。実に優美なこの華蓋は、さながら極楽に舞うカラビнка（迦陵頻伽）鳥が築しげに囀っているかのようである。小さな一つ一つの作品がすばらしい金色堂のハーモニートとな

って現われてくる藤原人の技巧も心にくい。

鴨野原に此の寺建てしみちのくの

藤原人を好しと思へり

川田 順

せわしい現代で片隅の美しさを味わう余裕

をもちたいものである。

（石上善応）

西暦紀元前後に大いに流行していた民間の俗信仰などを多く伝えているものである。この中にも、次のような記録がある。

歳暮の夕方、「二十七豆子二十七麻子」をとって、これを家人の髪にまぜ、井戸の中に投げ入れ、呪文を唱え、その家では年中傷寒に遭わず、又五方の疫鬼とさけることができる。

ここでは、歳暮となつてゐるが、節分の厄払いの儀は、追儺の儀にその起源があるらしい。「二十七の豆子」とあるから二十七、即ち十四個の豆の事らしい。何故十四個にするのか分らぬが、両方合すと二十八個となり、中国でいう二十八宿など何と関係ありそうである。家人の毛を入れるのは、多分その人の身がわりに毛を入れるのであろう。井戸は、何と言つても、生活にとって最も大切なものである。この中に、これらを投げ入れて厄払いをするという事なのであろう。

豆を用いている事は、今日と同じであるが、果して、この時「福は内、鬼は外」といったか否かは、明らかでない。又今日でも中

国でこうした事が行われているのかどうかも、私は知らない。とも角、こうした事が、今日の節分の起源だとすると、随分、古いことである。

日本に節分がいつ頃伝わってきたかにも、随分、いろいろな説があるらしい。ここでは、高橋良和先生の「年中行事の話十二ヵ月」の説を参考までに引用させて頂こう。

この行事のはじまりは、五十九代片多天皇の御代に、鞍馬山の鬼が荒すのを、思沙門天の示理により、七人の博士が鬼の穴を封じ込み、三石三斗の豆をもって、鬼の目を射たということから豆をまくことになったとも言い、また一説では文武天皇の慶雲二年（七〇五）天候不順にて五穀みのらず、人民が苦しんだとき、天皇は五大寺をして天下泰平、国土安民のために金光明経を読ましめ、民衆の租税を減じ、救済金を下賜る、追儺式を行ったことが民間行事となったらしい。

これも、又随分古い話である。いずれにしても、豆が大いに役立っているわけであるが、中国の十四個に比べると、三石三斗という量

は大変なものである。

今日では、節分の日、この豆を年の数だけ食べると、厄を払い福を迎えることになると言って、食べている。しかし、年をとる程に、一向この豆が食えず、逆に食べたい放題の子供は、数が少ないとは、又皮肉なことである。私なども、豆は余り好物でないので、大いに子供に食べてもらって、私の厄払いを兼ねてもらっている。

三

節分では、鬼はなくてはならぬ存在である。幼稚園などでも、女の子にはおた福面を、男の子には鬼の面をつくらせ、それをおぼらせて節分の祝いをしている。特に子供達にとっては、鬼は恐ろしいものではあるが、又悪物の代表として、無くてはならぬ存在である。きばをむき出したあの独得な顔は、スーパーマンと共に子供の夢の中では、無くてはならぬしる物である。

ところで、この鬼という字は、一体何をあらわしているのだろうか。少し専門的になるが、鬼の字を、文字学的に少し考えてみたい。

中国の文字の起源は、甲骨文字というのにさかのほることができる。甲骨文字とは、亀甲や獣骨に書かれた文字ということである。

今から約百年程の前に、中国の河南省のある地方で、何だかわけの分らぬ骨がたくさん出てきた。その土地の農民たちは、これを竜骨といって、薬になるとし、店にまで売っていた。当時、劉鉄雲という学者が、その薬を買ってきた所、変な模様のようなものが刻んである。よくこれを調べた所、中国で最も古い文字である事が明らかとなった。この骨が盛んに出てきた場所とは、今から二千年程前の、殷という都の跡であったのである。

この事が分ってから、全世界の学者がこれに注目し、発掘がどんどん行われ、今まで明らかでなかった殷の歴史や文化が、非常に明らかとなった。

元来、この亀甲獣骨は、当時の人が、占いの為に用いたもので、その上に書かれている文字は、占った事や、その出来た結果を刻みつけたものであった。今まで明らかでなかった漢字の起源が、これに依って、随分明らかになった。

凸版の右側の字が、甲骨文字で見られる鬼という字だとされている。しかし、大分今日の鬼という字と違っている。よく見ると、何か人の形に似ているが、それにしは馬鹿に頭が大きい。学者の研究によると、これは、人が龍を頭から被っている形だそうである。竹か何かであんだ龍で、その上には人の似顔が書いてあったらという。

これは、祖先を祭るとき、子供に祖先の似顔を書いた龍を被らせて、祭壇の上に坐らせた形をとつたらしい。祖先神の替りに、生き神を坐らせたという次第である。

お供えまで本当に食べてくれるとあっては、この上ない喜びという

外ない。凸版の左側の字は、それより後、周の時代の金石に書かれた鬼という字であるが、一番下の字は魂と書かれている。示は祭壇に物が乗っている字であるから、鬼がその前に坐っている形が、そのまま書かれているわけである。今の鬼とは似てもつかぬ鬼であったわけである。

鬼という字にはムという字がついている。

鬼

(甲骨文)

鬼

(金石文)

甲骨文字では、まだそれらしいものがないが、金石文では已にムがついている。これは何を意味しているかにも、色々議論があるが、一説では「私」字の略体であるといわれている。即ちこれがついている事により、鬼とは「私的な祖先神」であることを意味しているらしい。即ち家の祖先神の事が、「鬼」

なのである。そして、子供に龍をかぶせて坐らせたのは「かたしろ」なのである。これが、当初の鬼という字の意味であつたらしい。

古代人は、こうした祖先神に対して、一面畏敬の念を持っていたのであるが、一面こうした死者の悪霊が、厄いをもたらすとして恐れていた。こうした恐れが、やがて鬼である祖先神を、おそろしいものと思うようにな

り、その恐ろしい鬼をあらわすのに、次第にものが出たり、きばがでることとなったようである。文字学的に考えてみると、随分本義が失われてしまっているわけであるが、これが文化の発達というものである。

四

もうすぐ節分がやってくる。形ばかり各家々では豆を撒くことであろう。どんな寒い日でも、この豆をまくと、何か春が来たような気持ちになるから不思議である。

節分やつもるにはやき町の雪 久保田万太郎
冬の雪と違い、水気を含んだ春の雪は、すぐ積るが、又すぐ消えて行く。春遠からじを感じさせる歌である。

おどりでし鬼の面テや節分会
こんな歌が出てくる程、何となく楽しいものである。

年々歳々の行事であるが、いつも何か希望に胸のふくらむようなこの節分会は、いつまでもゆかしい年中行事としてやって行きたいものである。そして、今年も、何処でも厄少なく、福多い年であることを、願いたいものである。

観音 くわんおん

藤井実応

ここの床の間に千手観音さまの絵像が掲げられています。御覧の通りたくさんのお手があります。千の手をお持ちであるというので千手観音と申しますが、くわしくいうと千手千眼観世音菩薩と申しあげるのであります。この菩薩は千の慈悲の御眼で、私共すべての生きとし生けるものをじっと見ていて下さる。

そして千の御手をのべて、自由自在に人々をお導き下されているのであります。千手というものの、このお絵像も千本はありませんね。大体のところ普通の二本の手を除いて四十の手が画かれてあります、四十手だけでなぜ千手というかというと、その一手毎に慈悲心の中に二十五有と申して二十五の迷いの世界を含んで持つておられるのです。迷の世界の人々を救う為にはそういうものも含んでい

なければならぬからです。四十手にそれぞれ

ある二十五をかけると、千手となるわけです。千眼も同じようにその一々に一眼であるというので千眼と申します。みなさんこの千手観音さんを見て何とお感じになりましたでしょうか。こんなに手があつたら化けものかと思ひにありましたでしょうか。………しかし手を合せて、よく御覧下さい。このたくさんのお手には、或は錫杖、或は三股杖、或は宝珠、或は花、或は道具等それぞれものをもち、或はまた印を結んだりして、それぞれ役をうけもちをはたらいておられるのであります。その中でも特に気づかえられることは中央、胸の辺に合掌しておられる姿です。これが特にあざやかに眼にうつって参ります。又よく拝すると、そのお頭に立派な宝冠を頂

かれており、その宝冠の中央に仏さまが安置されてあります。この仏さまは申上げるまでもなくアミダ如来であります。千手観音さまがあの慈悲のお顔、うるわしいお姿を以て、千手に表現されているあの大活動をなされることは、常にアミダ仏を念じ、アミダ仏に合掌しておられるからであると思われまふ。

この千手観音は世に六観音の一とせられてあります。六観音というのは六道という六つの迷の世界をそれぞれ化導せんが為にお現われになった観音さまです。千手観世音、聖観世音、馬頭観世音、十一面観世音、準提観世音（或は不空罽索観世音）、如意輪観世音が六観音です。中でも千手観音は西国三十三番霊場のうちにも十三ヶ所にあり、京都の三十三間堂には一千一休奉安されているということです。この菩薩に対する信仰は中世以来盛んでありまして、古い今様の歌にも

「よろづの仏の願よりも 千手の誓ひぞたのもしき かれたる草木もたちまちに 花さき実なるといたまふ」と歌われています。

観音さまのことはいろいろの經典に説かれ

ています。法華經の第二十五章の普門品、これは普通、観音經と申しておりますが、これらにくわしく説かれています。また浄土三部經の中の觀無量壽經や無量壽經にも説かれております。

どういう因縁で觀世音菩薩と申上げるといふと、世音を觀する菩薩と書くように、世音というのは世間の人の苦しみ悩めます。それを訴える声を觀せられ聞かれると直ちに救いの御手を下したもう菩薩であられるからであります。人々を導く為には自在に身を変化して導いて下さい。法を説き導く為に仏の身を以てすると一番よいと思われる場合には仏の身を現わし、女の姿で導くが一番よいと考えられる場合には女の身と現われ、子供と導くがよいと思われる時には子供となつて人々をお導き下さる。かようにその人に応じ、その時処に依つて自由に適當なお姿を現わして導かれる。その事を觀音經には三十三通りのお姿が説かれております。それが元になつて三十三觀音とか、三十三靈場というものができたのであります。三十三はその数に限ったことではありません。自由自在に千変万化あ

らゆるお姿に示現せられることを意味してあるのであります。

觀無量壽經に説かれているように、觀音さまは、アミダ仏の御脇師として阿彌陀仏の大慈悲を頂かれて阿彌陀仏の御はたらきに加わつておられる菩薩です。千手觀音さんに限らず、どの觀音さまも、觀音さまは常に天冠に阿彌陀仏を頂いておられるのであります。それは觀音さまは常にアミダ仏を念ぜられ、アミダ仏に觀音さまのお頭に宿りなされて觀音さまのお心の主体——主人公となつておられる。觀音さまのお心は阿彌陀如来のお心になつておられるのです。アミダ如来の大慈悲心はそのまま觀音さまの心となつてアミダ如来の御はたらきをそのまま御はたらきになつておるのであります。あの慈悲にあふれるお顔も、氣高いお姿も常にアミダ仏を念じておられるからであり、アミダ仏は觀音さまのおつむりにお宿り下されているからであります。そして觀音さまは念仏者の勝れた友となつて下され、影の形にそうように念仏者を護り

導いて下さるのであります。觀音さまはアミダ仏のお現われであると共に、念仏者のお手本をお示し下されています。

限りなき智慧と慈悲とにましますアミダ仏を念ずる念仏者に小觀音です。アミダ仏を信じ一声でも南無阿彌陀仏申す者は、アミダ仏の光明におさめとられて小觀音として下さいます。生れたばかりの小觀音ですが、念仏相統の中に、阿彌陀仏の化育を蒙つてアミダの浄土に生き、やがて大觀音となつて、あの千手觀音さまのように自由無碍に人々を導き成仏することも出来る。かような身にならせて頂きたいと願うのが、念仏のみ教であります。実に明るい力強い念仏のみ教であります。法然上人は

「念仏を心の主とし、煩惱を心の客人とせよ」と仰せられました。そのお手本を觀音さまがお示して下さいます。觀音さまを拝むにも南無阿彌陀仏と拝みます。それを觀音さまはおよろこび下され、後輩たる念仏者をお護り下されお導き下さるのであります。

三分間法話

その六

精神薄弱児教育

——特に器楽指導と精神薄弱児の人間性——

岡 本 信 教



私が特殊学校を担当して以来、指導書や先輩の意見や医師との対談、九州大学医学部と精神研究の共同研究発表会等に出席し研究したりした。本年度は十月二十五、二十六、二十七日の三日間戸畑市市民会館と三六小学校での福岡県特殊教育研究会で「精神薄弱児における器楽指導」と題して発表した。

彼等は頭の極度の大小、脳膜炎、モンゴリズムなどいろいろと区別され、それぞれに特長ある反応を示すようである。

普通の人々が、精神といえば馬鹿あつかいにしたり、子供達からも、彼等はいろいろといわれてひがんでいる。

これでは本人達はどうにもならず、ゆがんだ人生を渡るように社会がするようなものだ。憲法第十三条

「すべて国民は、個人として尊重される。生命・自由及び幸福追求に対する国民の権利については公共の福祉に反しない限り……。」とあり、

又第二十六条に

「すべて国民は法律の定めるところにより、その能力に応じて等しく教育を受ける権利を有する。」とある。この基本法に則り、教育者は常に精神薄弱児を社会の一員として育成しなければならぬ。そこに最近問題化されてい

る「精薄児教育」の意義があると思う。

精薄児といえは山下清を思い出すという。

然し彼の指数を考慮する必要があると思う。

何故ならば、特殊学級とか、養護学校に入ればそのような長所を社会で認められるという

ことは程んど考えられない。所謂天才児教育

でなく、社会に出て一人前に自分の生活を営

みきることが先決問題であるからである。

精薄児は成人して小学校卒業程度の能力し

かならないのであって、それ以上は望めな

い。読み書きもある程度はのぶにしても、相

当の時間が必要となってくる。算数では特に

文章題は程んど駄目といつてよいと思う。

そのようなことから考えられるのは、

教育対象になるのはどのような精薄児なの

だろう、をいうことになる。

精薄を分けてみると、昭和二十八年六月八

日付「文初特第三十三号」をもって文部事務

次官から各都道府県教委、各都道府県知事に

通知された判別基準によれば、

「種々の原因により精薄発育が恒久的に遅

滞し、このため知的能力が劣り、自己の身邊

の事柄の処理及び社会生活への適応が著しく

困難なものを精薄という……」とあり、教育
対象となるのはこの中の知能指数七十五か
ら、五十までの精薄児童である。

精薄児を分けると次の三つに大別される。

1 白痴……知能指数二十以下のもの

2 知愚……知能指数五十と二十のもの

3 魯鈍……知能指数七五と五十のもの

では何故このような子供が生まれてくるので

あろうか。原因を突きとめることが学問的に

も医学的にも重大なことは云うまでもない。

そこで一番多く考えられることを短縮して、

十項目挙げてみよう。

1 大酒家

2 三才児までの疾病

3 三才児までの栄養不良

4 発熱児の痙攣

5 血族結婚

6 早産

7 貧困

8 溺愛

9 遺伝

10 両親の教育水準

兎角結婚、妊娠、生育というようにその時

時が問題になるのであって、親の責任は重大
なものがあるといわねばならない。

右の原因から考えても後天的なものが多い

ことがはっきりするであらうし、先天的な面

での一部を紹介してみよう。

例えば、知能指数一〇の父と九十の母と

の間に生まれる子供は統計的にどのような

っているのであろうか。

「プラスマイナス十五」が基準になり

110±15

80±15

ということから最大百二十五の指数、最低七

十五と出て、その間の子供が生まれるとみて

よいようである。だから最低の七十五の子供

が出来た場合は精神薄弱児ということにな

る。

ではこのような子供達はどのような性根を

もっているであろうか？ を私のクラスの

子供十五名の中から列挙してみよう。

1 精神的に過度の劣等感や抑圧感情をもっ

ていて、本人の個性がゆがめられている

2 遊びや仕事などの生活経験が不足してい

る。
3 心理的な解放を望んでいる。

4. 攻撃的破かい的行動をもっている。

5. あらゆることに自信がない。

6. 信頼感がない。

7. 物事が長続きしない。

8. ていねいに物を使いきれない。

9. みんなと一諸に行動が出来ない。

10. 何んでも人並みになく動作がにぶい。

11. 後始末などきちんと出来ない。

以上のことが体験から出てきた。

特に大脳機能の発達が遅れているので、呼

ばれたらすぐ返事をするとか、体の動きを敏
しょうにするとかが出来にくい。

性格と大脳機能とを結びつけて考えてみる
と、一番問題になり、解決しなければならな

いのは、仕事に自信を持たせ、積極的に、

「一人前にできるのだ。」という安心感（精
神衛生）というものを身につけさせることが

一番大切なことと思われる。

そこで私は子供達の一番好きな音楽をとり

入れて（器楽指導）指導してみた。

私は唯、精薄児が人口の四パーセントはい
るという事実に基づいて少しでもその人達を助
ける糸口になれば幸いと思う。そういう假定

の基に立って指導したことを延べてみたい。

子供たちは音楽をすることにより精神を安

定させ生まれながらにして持っている「リズ

ム感」というものをしっかり身につけさせた

い。何故ならば正にこの世はリズムミカルな仕

事から出来ていると思うし、それが実社会に

出て、十分に役立つことを信じつつ……。

ではどのような機能訓練を試みたかとい

と、

1 模倣の利用（動作化）

2 自発的興味の喚起

3 変化を好む心理の応用

4 功みな競走心の利用

5 感覚的直観の訓練

6 どの子も持っている劣等感をとり除く

という六つの項目を主眼にして行い良い結果
が生まれた。この指導は精薄児をもつ家庭で

の教育にも直結しているし、その指導過程に

は仏教でいう「上求菩提下化衆生」というも

のにも通じなければ出来ないことを確信する

ものである。これが憲法第二十六条というこ

ともなるといえよう。

さてテレビを視聴させることにより、又常

に木琴やハーモニカを持たせて上手下手にか

かわらず自由打、自由吹きから和音指導など

は普通児と変わらないが、唯ゆっくりと時間を

かけることである。私は木琴指導を一年、

ハーモニカ指導を一年というふうの一つの指

導を一ケ年かけてやってみた。興味が半減

すれば自発的喚起のために大型シロフォンで

四分打や八分打、和音打を教師の手でやると

絶対的に児童は喚起せざるを得ないと思う。

指導の過程の中で少しでもよいところがあ

れば劣等感をとり除くためにも賞讃は絶対に

忘れてはならない、理論的なことは程んど不

可能であるので、はめる……はめる……少し

でもはめる。そうしているうちに子供達は僕

も上手ですか……私は……と活気づいた。

直観的訓練のために目、耳、手先の三拍子
は常に訓練が同時にその場でなされていく。

何曲か指導してみても今迄普通学級で友達か

らみすてられ、教室の片隅みにじっとして、

邪ま物あつかいにされ、しょんぼりとしてい

たこの子たち、今日は又これで一人救えた……

……と、この喜びはひと通りのものではない。

この子たちがそんな暗い日々からどのよう

な「ことば」が生まれてきたでしようか。

昨年だったか六年生の曲「螢の光」を指導した時、

A君「先生六年生の曲ができたね、頭がよくなったわ。」

B君「僕たち頭がいいのね。」

C君「休み時間なんかいらなから
もつとしようよ。」

又今年の指導でも感心したのは、E君は休み時間をとらずに「先生、僕リズムのけいこを覚えるき教えて」とか「先生昨日帰ってから、茶碗たたいてけいこしたよ。」

この言葉の中には少しでも並のことが出来たいという気持が十分に何かわれる。

このような意欲を高めさせるとか、研究心を持たせるとか自信を持たせるとか、劣等感をとり除く上には大切なことと思う。

「子供のことば」これを聞けば聞く程、涙ぐましい可れんな天使の声である。

では最後に私の組の指数のずっと低い子を二人紹介してみよう。

M君は20知能指数しかない白痴だが、休み時間大型シロフォンを四分打ちだが、和音の

ように打っていた。私が賞めると、今度は楽器戸棚からリラグロックンを取り出し唯々夢中になって何やらたいている。彼は唯、音というものに興味を持っているだけである。



家に帰ればすぐラジオをいじっているのである。

次にモンゴリズムのG君は時折り、自分の

感覚に訴えてわりによくハーモニカを吹いてくれる。この姿は実に神々しくみえる此頃である。

この教育は根気と愛情の中に無我夢中にやる外ないと思うし、指導した中からこれだけできたのだからもう忘れてはいないだろうと思つて二三日休んでそのことを指導したり、反省の意味でやらせると完全に忘れてしまふ子供達である。

一日も休まず継続して、力のある限り、共に掃除をし、遊び、遊びの中に学び、共に苦しみ合うところに立派な教育というものが、出来て、一人でも多く救えるのだらうと思ふ。互いに信じ合い、助け合う所謂浄土念仏の真隨がこの教育の根本精神といえそうである。

以上のことから、精薄児とはこんな児童であり、このような指導もあり、児童をこのように導けばよいのだなということが一人でも多くの人に理解していただき、児童の一人でも社会に出て理解のもとに善導していただければ幸いに思ひます。

(写真は吉田雅男氏提供のもの)

三部経の再発見 (二)

須藤隆仙



仏教の根本理

宗教新聞紙上で、浄土教は迷信とならぬか、ということ提言した人がある。以前にも歴史学者が「念仏は呪術的なものになっているのではないか」と注意したことがある。

浄土教は仏教でない、などといった人もある。いずれもおかしな話である。

どうして浄土教に限って、そのようなことがいわれるのであろうか。

私は、『仏教』が、『宗教である』という本来を離れて、単なる哲学にあつかわれ、学問にあつかわれたとき、そのような疑問が出てくるものと思っている。

逆にいえば、『仏教』を『完全なる宗教』としてみた場

合、浄土教こそ、仏教の真髄であって、そのような疑問は出てこないはずである。

それについても、三部経はその間の消息を教えてください。大体、仏教の根本理というものは、どのようなものであろうか。四諦といい、八正道といい、十二因縁といい、三法印といい、四法印といい、七仏通戒偈といい、みな究極は『転迷開悟』という一語につきるものばかりである。

『転迷開悟』こそ仏教の根本理なのであって、最低が最高になり、最小が最大になり、最悪が最善になる、という、いわゆる、迷いが転ぜられて悟りになる、ということ以外に仏教の根本理はないのである。

この根本理が具体的に開顕されて、それは八万四千の法門といわれるほど、龐大な教えが展開されているわけである。

その中で、浄土教こそ、この根本理に最もよく合致する法門であらう。

それは泥の凡夫が、如来の浄土に生れて、救済の力となる、という教えだからであり、迷（凡夫）が転じて悟（救済力）となる、ということが、浄土教ほど鮮明にあらわれたものはないからである。つまり凡夫が仏になるという仏教の根本理は、浄土教によってこそ、容易に解決されたのであって、なればこそ、浄土教こそ、最も仏教の中の仏教とされる所以なのである。

お釈迦さまはために、浄土の法を『大利無上の功德』という（大経）、それを説いた経を、『たとひ大火三千大千世界に充滿することあるとも、かならず、まさに、これを過ぎて、この経法を聞きて、歡喜信樂（しんぎょう）し、受持し、誦誦し、説の如く修行すべし』（大経）とすすめておられるのである。そして、特にこの大経は『当来の世、経道滅尽せんに、われ慈悲を以って、哀愍して、ひとりこの経を留めて、止住すること百才ならしめん』という、末法の世こそ、ますますこの経が必要となることを、説示しておられるのである。

さらに、それよりまして重大なことは、この大経について、『多くの菩薩ありて、この経を聞かんと欲すれども、得

ることあたわず』といい、『もし衆生ありて、この経を聞かぬものは、無上道において、終に退職せじ』といっておられることである。即ち仏教の根本理を完全にされた浄土の經典は、求めようとしても、菩薩でも求め難いほど、貴重のものであるが、ひとたび求め得るならば、いかなる凡夫といえども無上道不退転の境涯を開くことができる、というのであって、いいかえれば、それは、哲学や学問で追求しても、浄土經典の真髓は領解できない、というのであって、信仰の世界、宗教の立場に、この経を身読せよ、とさとされたものと拝されるのである。

弥陀如来のお浄土に往生する、ということ、如来が長い思惟の末、勝れたお浄土を建立された、ということ、そのようなことが、仏教の根本理に背く、と見るのは、經典の真実に背を向けているからであって、学問や哲学のみでは、そのようないろいろの背向けの疑問も多かろうと思われるのである。

念仏と呪術

念仏が呪術的である、という人があるとすれば、お釈迦さまは、何故に、とくに念仏をすすめられたか、ということが真剣に考えられねばならないのである。

そのまゝに私達は、呪術とはどういうものか、ということを考えてみる必要があるであらう。

簡単にいえば呪術は、いわば『まじない』であらう。

『まじない』にはいろいろの目的があることである。災難をのがれたい、というものもあれば、病気が癒りたい、というものもあり、商売が繁昌したい、というものもあり、憎む人に罰があたるように、という物騒なものもあるであらう。

いづれも、何ものか、自分以外の不思議な力をかりて、ある目的を達成しよう、ということに結論されるわけである。

すると、いま、お念仏をとなくて、如来さまのお力により、仏のお浄土へ往生してもらおう、というのも、広くはこの『まじない』の範疇に入ってしまうと錯覚する人も多いことであらう。

それでは、念仏は実際に『まじない』（呪術）か、というに、念仏は呪術ではない、というのが宗乗学者や宗教学者の一般的な見方なのである。

『まじない』でないからこそ、『まじない（呪術的）』になってはいないか、という注意も出てきているわけである。

どうして念仏が呪術でない、とされるか、というと、そこには呪術のもつ不合理性がないからであらう。

呪術には、雨が降らないのに、降ると信じて呪文を唱える、病気が直らないのに、直ると思つて呪文を唱える、という不合理性があるわけである。それ故に、呪術は、文化のない原始人の宗教に見られる、と限定され、または魔術と同義にさえあつかわれるわけである。

ところが念仏してお浄土に生れかわる、ということとは、不合理なことではなく、合理的なことなのであり、できもしないのに、やっているのではなしに、実際にでき得ることなのである。このことをお釈迦さまは、とくに注意せられて、『われこの利を見るが故に、この言を説く』（小経）と証明され、そしてまた『わが滅度の後たるをもて、また疑惑を生ずることをうることなかれ』（大経）と注意しておられるのである。念仏して往生するということが合理真実のことであるから、お釈迦さまは、とくにこのように注意せられたのである。

その故はまず念仏すると、心が開かれるのである。この凡夫の私の心が開かれてくるのである。

凡心が開かれると、そこに仏のみ心が入ってくる。私の心の上に、仏の心が入ってくるから、私は完全に仏の心に包まれてしまう。いいかえれば、私の心が、仏の心になってしまふ。そこに往生の世界があらわれて、私は念仏の故に、ことごとく往生してしまうのである。

そこを觀經の八觀には、『諸仏如来は（阿彌陀仏のこと）これ法界身なり。一切衆生の心想の中に入りたもう。この故に汝ら心に仏を想うとき、この心すなわちこれ三十二相、八十随形好なり。この心、仏を作る。この心、これ仏なり』と説いておられる。

三十二相、八十随形好とは、仏の勝れたお姿である。念仏するときに、たちまち凡心は開けて、そこに三十二相、八十随形好の仏があらわれてくる。そしてそのことは即ち往生が確約された証拠であるから、ことごとく往生が可能とされたこともある。

かくの如く、念仏は、合理真実の上に可能とされた。おこない々そのものである。

そしてそれはまた私の心が全く宗教的な世界にぬりつぶされたことであって、そこには全く宗教的な私あるのみである。私と仏とが、念仏によって結ばれる、そこには、なんの不合理性も認められないから、念仏は呪術ではないわけである。

しかし、世の中には、呪術と同じ形態で念仏にことを願う人も、現にあることである。

そのような出だしの念仏であっても、念仏は呪術とはならない。

仏を思うことによって、仏に照らされて、呪術的な心の暗が消えるからである。

曇鸞大師は、このことを、氷の上で火を燃すが如く、燃える火は執着のかたまりであっても、仏の真如の水に消されていく、と教えておられる。心が真実に向うのであるから、呪術の不真実は消されていくわけである。

念仏が呪術的ではないか、と注意した人は、実は世人の、人間的願望を問題とせねばならないのであろう。

それはともかく念仏は、世人が呪術的であっても一向にかまわないのである。それは即ち念仏は呪術をも完全に超越する道だからなのである。

お釈迦さまは、そのことを『念仏せんものは、まさに知るべし、この人はこれ人中の分陀利華（泥の中に咲いた蓮華）なり』（觀經）とも仰せられたのである。

お念仏は仏から下賜された真実のものであっても、称えるのは、迷いだらけの凡夫であるから、ときとして邪（よこしま）に称えることも多いことである。そのことが呪術的といわれるのであろうが、よこしまな念仏でも、称えたことによって真実へと昇華されていくのである。即ち泥沼の中に蓮華が咲く所以であらう。

旅行力メモア

(8)

佐藤 治子



ニュー・イングランドの牧場

スキー・リフト

六日の朝、九時頃ホテルを出た私達はニューヨークランド特有の美しい景色の展開されるあたりを走りグリーンマウンテンのふもとについた。冬にはスキーヤーが来る所とかでホテルもふもとに二三あるがひっそりとして

いる。
「治子、スキー・リフトへのれる？こわい？」とマリオンに何度も念を押される。今までのきいてはいたが乗つた事は勿論、見たこともない。スキーに行く人達に話をきいていただけである。スキー・リフトなんて思っただけでゾッとする。でものらなければ又ちがつた景色は味わえない。勇気をふる

い起して「ノー」と答えてしまった。ここのリフトは二人乗りで遊覧に來ている老人連がのって行く。あんなおばあさんがのるなら私だつてのれると自信がついた。

でも着物と、このぞうりではと思わずぞうりをみつめる。マリオンもすぐ気がついて、切付売場の

人に何か無いかときいてくれた。もしぞうりを落したらと考えただけで又してもちゅうちょしてしまふ。モンペでももつてくればよかった。着物を着てぞうりをはいてのるなんて恐らく日本でも見られないのではないかしら。係りの男の人は輪ゴムの上からぞうりの底へとかけた。リフトを初めてみた私は乗る時止まつてくれないでぐるぐると動き出しな

のが分つた。青草が一面にしげっている急斜面をぐんぐんと空の椅子が登つて行く。「二人乗り」という事は気味わるさを半減してくれる。一方からマリオンがのると同時に反対側から男の係りの人が私を押し上げてくれる先にのりこんだマリオンに抱きかかえられた時もうリフトは地上を離れてどんどん高くなつて行く。ドキドキとドウキが激しく打つ。着物の事故すべりがわるい。その上吹き上げて来る風に裾がヒラヒラとする。ひらひらする裾をあわてて手で押さえていた。

人が「いい気持ちでしたよ」なんて声をかける。もうのってしまった上はどうにもならない。シカタガナイとはこの事である。

二十五分もかかったと思われる頃、頂上へついた。リフトよりおりる時が又大変。うま



スキー・リフト。これは一人乗りのもの。
グリーン・マウンテンが遥かに見える。

くおり
ぬとこ
るぶの
で少し
呼吸が
わかつ
たので
ひよい
と降り
立つ事
が出来

た。ヒヤヒヤ乗った事など忘れ得意になって頂上の休けい所で葉がきをかいた。家の者は皆びっくりしたらしい。次男は「すすめても絶対にスキー・リフトなんていやよって云っていたお母さんが樹水をみたりスキー・リフトにのったり、それが外国で初めてのつてみるとは、えらいものですわね」とひやかした手

紙をよこした。日本で山へのぼるとおたがい「お早う」とか「お元気で」とか声をかけあうのが山でのエチケットとかきいていたが、これはアメリカも同じで皆親しく声をかける。特に日本着物の私には「私はテキサスから来ました。南部へもいらつしやい」とか足袋とぞうりとを具合がよいかなどきく人もあつた。ドキドキ屋の私ももう何ともない。遠山のかさなり合つた美しい景色を眺めてから再びリフトにのつた。もう今度は大丈夫。すれちがうリフトは、あまりここまで来る人はいないと見え空のままグルグルと上つたりおりたりしている。得意な顔でマリオンと、時々顔を見合せてはニヤリとしたものがある。地上へ降り立つた着物姿の私をみて、そこまで来て眺めるだけで帰る人もこれ、からリフトへのろうとする人々も皆不思議そうな顔をして私をみつめていた。

牧場と牛

陽がさしている広い牧場を右に左にとみながら車はきれいな道路を走る。オーストラリアから移住して来た音楽一家で有名なトラッ

プファミリーがこのあたりの景色がオーストラリアに似ているというので住みついたという家の近くまで行ってみる。ひっそりとしていて人の姿もみられなかった。

この辺は山々に囲まれていて所々に家があり殆んどはなだらかな起伏の広い牧草地帯である。大きな樹が紅葉して囲いの中には牛がゆうゆうと草をたべたりそのそと歩いたりしている。ニューイングランドは美しいときいていたが本当は美しくて、静かでゆうゆうとしている牛をみるとこちらまでのんびりとしてくる。広い牧場の一角は大きな納屋のような建物がある。これはバーンと云うのだそうでニューイングランドとよばれているニューハムプシヤ、バマント州やメイン州などの北部地帯の牧草地にあつて冬は非常に寒いので牛や馬を入れてやる為の大きな納屋の様なのである。そしてこれは北部独特のものらしい。このバーンはフロリダへ行く時通る牧場にはみられなかった。道路に沿って農家がある。牧場で働いている人達をみたいたと思つていたが、めつたにそういう人達がみられなかった。只農家の家の前に止まって

ないと幾度も思わずにいられなかった。

早くしないと明るく中にサリーの家へつかないとスピードを上げるマリオンのと看取して一人で何と美しい入日だらうと刻々と山の向うは沈む夕日とあたり、といつても長く連る山全体があかね色にそまってその色がどんどん変化してむらさき色になって行く景色、まるで大きな画をみている様で俳句も何も出て来ない。只々、アメリカ、広い国のアメリカならではみられぬこの景色、誰かにこの自然を染しめるハッピネスを分けあたえたいと、とても筆に書きつくせない大きな美のふところにいだかれた私であった。

景色に酔い感謝の心一杯の私と長いドライブ（四〇〇マイル）に疲れたマリオンとが玄関の前に立っていたサリーに迎えられた時は日もすっかり暮れた七時過ぎであった。

インディアンサイン

翌日、サリーのとなりの家を訪問した。ドロシーという奥さんの案内で広いお家をみせて頂く。古い家柄とみえその土地はアメリカインディアンの特産であったのを百年ほど前

に買いうけたものだそうである。壁にその時の契約書が額に入れられてかけてあった。

テレビでみた西部劇の一つにインディアンが字がかけないので+印をサインの代りにかくのをみた時、ハハと大きくうなづけた私は、実



バマンド州にあるカバード・ブリッジ。

は、実はこのドロシーの家でみせて頂いたその契約書に+のサインがしてあり、再び車にのり、ドロシーに見送られた私達は、ボストンシンフォニーオーケストラの所々有で夏期にここで演奏会を催すというタンデルウッドへ寄った。芝生が実にきれいに手入れされてあり、人は誰もみえない。広い広い芝生の向うに日本風の建物とも考えられる会場がある。名士も沢山ききに來るといふこのタンデルウッドは垣を境に庭より見下ろせる広場は車の駐車場になるという。建物の外の私達は暫く散歩した芝生に皆腰をおろして涼風に吹かれながら演奏をきくのだそうである。有名な行事だそうで方々よりそれをききに集まってくるという。あの演奏会できいた「悲愴」のメロディがどこから流れて来る様な錯覚にとらわれながら広い芝生に立ち、快い風に吹かれていた。

ニューイングランドにいる間高い山々にさへざられ暫く音楽は遠ざかっていた私は、ニューヨーク州の北部に入り、麓を切り開いたハイウェイを過ぎた時マリオンがスイッチを入れたと、なつかしいニューヨークの放送局のWQXRの局番と何とショパンのピアノコンチェルトがきこえて來た。マリオンのすば

タングルウッド

わしいドライブ、雄大な美しい景色そして音楽と三拍子揃ったとはこの事であった。もったいなさ一杯の私は家へそして親しい方へかく便りにこの感激を勿論かかずにはいられなかったのである。

ニューヨーク州とは美しい処であると思つて、空からみた時何と森の多い所だろうと思われたのはこのあたりかしらなどと考え、往きに通ったパークウェイとちがうけれどやはり美しいパークウェイをブロンクスビルのあのリスのいるマリオンのアパートへとかえつて行つたのである。

スーパ―・マーケット

マリオンのアパートのある森を出ると道路があつて、そのそばに一段高くハイウェイが通っている。ハイウェイの両側にある道路は途中で他の道や住宅へ向う為のいわばサイド道路とでもいえばよいかも知れぬ。その道路に沿って人が二三人並んで歩ける細い歩道がある。だから坂になつていてゆっくり歩るいて四五分行くとハイウェイの下に交差点があり、それを渡って右へ折れるとスーパ―

・マーケットがある。そこはマリオンがオフィスへ通う駅に近いので夕方汽車を降りるとマリオンは大い買い物をして帰つて来る。

マリオンに連れて行つてもらつた私は何でもそろつているのに先ずおどろいた。広い建物の中をみると周囲に無駄なく売物がならんでいるなかがめぐらされている。中央は自由に歩ける様に何列もたながあつて、その両側とも売物が自分でとり出せる様おにかれてゐる。つまり歩く両面をあらをみたりこちらをみたりして買物をしながらぐるぐる廻れるようになってゐる。入るとすぐに沢山の手押車がある。それを各自が一つづつ押して広い店内を歩るき必要品をたなから自由にとつてはかこへ入れ、最後にかん定をする場所へ行つて、支払いをするのである。

肉屋がつかつてゐる冷蔵庫は細長く大型のもので上から取り易くするべくふたがとつてあるものと考へて頂けばよい。肉の種類も沢山あつてローストビーフをと思つてさがせばその品が大小好き好きの大ききものが買える様になつてゐる。フライドチキンにする為に鳥が手頃の大ききに切つて一切でも何切で

もセロハンの様なものにつつまれ、自由に選んで買える様になつてゐる。

野菜の売場へ行けば又よりどり次第。私は日本からカツオブシのけすつたのを少しと、お醤油をほんの少しビニール製の小びんに入れてもつて行つた。おすましの好きなマリオンに作つて驚かせたつたからである。これに長ねぎを少しほしと探した処が日本の長ねぎとはちがうけれど、もう少し短いねぎがあつた。そして玉子を使いねぎをちらし一番簡単な玉子とじを作つて喜ばれた事がある。

この長ねぎに例をとつていえばほんの少しでもほしただけとればよい。ここは売り子がいり取り分けてくれて値段をつけてくれるが支払いは後である。

パンも色々の種類がある。家へかえつてふかせばおまんじゅうになりそうな丸い形をしてあとは台所で好みによつて焼けばよいようにして売つてゐる。雑貨品の処は紙でも数多くならんでゐるし、風呂場で使うマット（これは実にタイルのお風呂には便利な品でほしかった）或はそうじ用の品々タワシの様なものに至るまで何でもあつた。台所用品は女の私は

皆一つずつ買ってかえりたいとよくばり根性
がむくむくと顔を出す。

ああこれは重宝だ、あれは皮をむくのに便
利だなどときりが無い。ベストやフイフスア
ヴェニューで買いたい気持も起らなかった私
は、このマーケットの台所用品はほしいもの
だらけであった。洗ったお皿等をおいて水を
切るかごの様な入れもの、これはコップはふ
せておける棒の様なものがわきについてるし
お皿をたてかけられる様にしきりもついてい
る。ほしいなお友達のおみやげに買いたいな
と思ってもどうして送るか途中でビニール製
の事故形がまがってしまふだろう。中身より
荷造りが大変だなどと考えると手が出ない。

又アイスクリームがほしいと思えば何種類
でも冷凍機の中に入って売っている。ミルク
はここでは細長い箱に入っている。私はマリ
オンの処で過した第一夜の翌朝ヨーグルトを
出され感激した事であったが、そのヨーグル
トは又何種類もある。マリオンは色々買っ
てみてくれたが苺の入ったのが一番おしいと
いった私に毎日、ヨーグルト売場へ立寄って
くれたのである。手押車に買物を山と積んで

押して行く婦人、さらに少しだけほりこん
で押して行く男の人等にすれちがう。

所々に売り場に立っている売り子は男の人
が多かったと分けて売う果物とか野菜の売
場には必ず人がいて、値段をそこで書き込
んでく



マサチューセッツ州の
タングルウッズの庭の一部

る。

そして

買物が

すむと

かん定

場に行

く。計

算台の

所に人

一人通

れる位

の間隔をおいて何列か台があつて、買物がす
んだ人はそこへ来て自分の買ったものをレジ
スターの前の台へのせるとすとそれが動き
流れ作業の様になって係りの人の処でスト
ップする。ボタンでも押すにちがいない。そこ
で値段のついた品物を取り上げ、値段をチェ

ックして行くと計算器に総計が出る。それを
支払うともう一人の係りの人が買物の大きさ
分量にしたがって茶色の丈夫な紙ブクロを出
し入れてくれる。これで買物がすんだわけ
がある。大分なれた私が一人で行って小さい物
を一つ二つ買った時、支払いの人が二三列は
行列しているのかんだ場も一列に五六人。

つ並んで待っている。一人の婦人は大買物を
して台の上に山と買物がつまれている。どの
列に並ぼうかしらとろろしていたら、他の
列の人が私に「ここへいらっしやい、貴女
のは少しの様だから先へなさい」と順をゆず
ってくれたのである。それはどうも有難うと
礼をいって、先に支払わせてもらった。

このスーパー・マーケットではレジスター
係りに黒人の女の人がいた。前には無愛想で
ニコッとしめないその人が順をゆずられた私
は一すニコッとしたけれど、白人の多いお客
様にビジネスはビジネスといった態度でい
る。マリオンはいつもよい人だといっていた
が人種の差別待遇をしないニューヨークの特
にこのマーケット近くの住人がインテリが多
いせいとも知れない。よい職場をもてる黒人

は幸せである。

さて、私はここを出る時中年の品のよい紳士が一人入って来てさつと中の売場へ入って行く態度があまりにもあたり前の事をしているだけであり。なれ切ったその様子をみて思わず微笑にはほをゆるませてしまったのである。そして、誰々の御主人はこんな事出来るかしら。あの方の御主人は御一人でスーパ―・マーケットへ平然として入って行ってやるかしらなどと考えずにいられたかった。いくつになっても独身でいる男性も女性も多いアメリカの事故、買物に入ってくるのは、当然であるし、生活環境が日本とちがうのだから感心して、ほめたたえて日本の御主人方にこういう風に出来ますかなどという筋合ではないけれど、好奇心に満ち満ちていた私には、ほほえましい風景としてうつったのである。

この話を帰国して話した処が家の者に「一度東京のスーパ―・マーケットへ行ってみていらつしやい。鎌倉の事ばかり考えていては駄目よ」と笑われてしまった。若い御主人方や男の方達が平気で買物しておられるそうで

る。よい事は大いにとり入れる方がよいと思っている私の方が一寸おくれていて、もうすでにスーパ―・マーケットは本場のアメリカより輸入されていたわけで大いに恥入ってしまった。

只殆んどといってよい位市民がスーパ―・マーケットで食料と雑貨品を購入する生活環境にあるアメリカの事故、その規模は実に大きいし品物は多量豊富に揃っている。そして第一に清潔である。大きなスーパ―・マーケットの駐車場は東京駅の乗車口と降車口の前との広場を合わせたものよりまだ広くて、一週間の買物を一度にして帰える人も多い事だし殆んどが車で来ているから、土曜日など前を通った時駐車していた車の数はあまり多くて只おどろくばかりであった。マリオンに連れられ手数料をとらない、特売マーケットといった様な処に案内された事があった。(プロンクスビルより北の方の町にあった)「主婦の店」という名前で日本にもあるそうだが、手数料をとらないから品物が安いわけである。私の感じでは人が多くて、ごみごみした感じと普通のマーケットの方が落付いて品物を選

択出来るような気がした。

又個人的にその店独特の品物を売っている店がないわけではない。日本でいう老舗ともいえばよいかも知れぬ。特別製のチーズ、パンクッキー等がほしい時はそういう店へ行く事もある。或る日近くの陸橋を渡り郵便局へ行つたかえり着物姿の私をみて、フラフラとちどり足で歩いていた酔っぱらいに「オー・ジャパニース・レディー」と声をかけられ、足を早めれば長身の人だったので同じ様に足早について来る。マリオンの家へ帰えるまで森の小道を通らなければならない。困ったあげく、このスーパ―・マーケットへ飛び込んでしまった。中をぐるぐるあの売場、この売場と一廻り、二廻りして出口でそつと外をみればきよろきよろしながら又元の道へとよろよろと引きかへす姿をみて駐車していた車のかげを通り、交差点にいた二人の警官をみて安心し足早に森の小径へと戻った事があった。アメリカにいる間只一度しかみなかったよっぱらいであり、よっぱらいをまくのにマーケットを利用したのは私位かも知れないと苦笑せざるを得ない。

扉の御法語

上人御存生の時西国の修行者申けるは、仏の相好を常に心に懸て念仏の数遍少く申さんと、心は散乱て数遍多申候はんと、何か勝れ候べきと。其時御前に候僧の云、心に常に仏の相好を思て申さんこそめでたかるべけれど。上人宣、源空は全さは思はず、本願のむなしからず、称念せば必ず生るべしと思より外には、全心にかくる事なしと。

(諸人勸化の御詞)

諸人勸化の御詞は、断片的に上人の御詞を列挙したものです。この御法語はこの項の全文です。要するに心を落つけ、み仏の円満にして麗しいお姿を心に描きながら申すお念仏は、たとえ数が少なくとも尊く、また心が散乱している時には数多く唱えることによつて尊いでしようが、しかしどちらがよいのでしょうか。この質問に対して別の僧が、前者のお念仏の方が優れているでしょうと言下に答えました。すると上人は「自分は全然さうは思わない」と強く両者を否定して、本願の有

難さを仰ぎ、お念仏を唱えさすれば往生できるので、この事以外のことはまったく心にかけないで教られました。

これと同じことを申された御法語は、いくつでもあります。この御法語もその一つであります。

即ちある人が、女人にも近づかず、不津の食もとらずにお念仏を申すのと、朝夕女人と親しみ、酒をのみ、不津食を口にしながらお念仏を申すのでは、まるで功德が違うに相異ありますまいと尋ねたのに対して、上人は「功德ひとしくして勝劣あるべからず。そのゆへは阿弥陀仏の本願のゆへをしらざるもの、かかるおかしくうたがひをばするなり」と答えられました。

本願を信じてお念仏を申すことによつて往生ができるのであつて、その人のその時の様子がどうあろうとも関係のないことなのです。このことについて、上人は言葉をかえて繰り返し繰り返し申されています。「本願と申すは善惡をへだてず、持戒破戒をきらわす、在家出家をもえらばず、有智無智をも論ぜず」という御詞が示している通りであります。

このように上人があらゆる機会に言葉をかけて申されているわけは、本願の有難さを純粹に深く信ずることが容易でないことを示しています。人はどうしても自分中心にものごとを考え、他人と較べて自分の優れている点を発見しようと努めます。学問をした人は無智の人を軽んじ、財産のある人は貧しい人を蔑すみ、才智に富んだ人は愚しい人を侮ります。また徒らに人を憎み怒りもします。このように多くの人には信仰がないことを立証しています。実は自分の愚かさを反省し、自分の行いを戒めし、自分をしみじみ味うところに信仰が芽生えるものと知りたいものです。

本願の有難さ、本願の力を深く信ずることは、理解だけでできるものでありません。そこで上人は「先づ名号を唱えよ。名号の徳として妄念自ら止み、願心自ら生ずる也。何に況や本願の元意は乱心止み難き者を化せんが為也。安心止み難きに付ても、一向に本願を仰ぐべく、散乱静まり難きに付ても一向に名号を唱ふべき也」と申されています。

先ず名号を唱えよ、の一言を有難く頂くかありません。



無量寿經の話

その一

本願ということ

香月 乗光

一

私たちはおびただしい数にのぼる仏教の經典の中において、特に「仏說無量寿經」と「仏說觀無量寿經」と「仏說阿彌陀經」との三つの經典を、信仰のよりどころとして、心から尊重し頂戴しています。それは法然上人がこれらの三つの經典を「浄土三部經」と名づけ、これにもとづいて浄土宗をお開きになったことによるのであります。しかしまたそれと同時に、これらの經典が今日においても、私たちにとって最も重大な生と死との問題を解決して、人生に光をもたらし、生きゆく力を得せしめる、すぐれた教えを説

いているからであります。

この「浄土三部經」は、いずれもその名の示すように、釈尊が無量寿仏即ち阿彌陀仏について、お説きになった經典であります。一体、仏教の經典には三世と十方とに、多くの仏がましますことを説いています。その中において最も長い年月の間、最も広い地域にわたって、最も深く信仰されてきた仏は、実に阿彌陀仏であります。そしてこの阿彌陀仏の信仰は、常に「浄土三部經」によって導かれ広められて、人々の求道を進め體驗を深めてきたのであります。法然上人の浄土宗は、実にこの阿彌陀仏信仰の帰結として、その精華を発華するものであります。

それならばどうして阿弥陀仏が、このように盛んに信仰されたかと申しますと、それはこの仏が慈悲の仏として、あらゆる人々をひとしくすみやかに、お救い下さるからであります。「無量寿経」によりますと、阿弥陀仏は法蔵比丘と申されたその昔、すぐれた本願をおこし長い修行をつまれた結果、遂にその本願を成熟して、無量寿、無量光の仏となり、浄土を構えて、救済のみ手をさしのばされ、どのような者でも、心から専らその名を称えるならば、必ずその浄土に往生せしめられるというのであります。即ち阿弥陀仏の慈悲は、この本願によっていつでもどこにおいても、あまねく一切の人々にゆきわたり、誰でもただその名を称えるだけで、本願にかなって救いに預れることが出来るのであります。

法然上人が新しく浄土宗をお開きなり、専ら仏の名を称える念仏を修すべきことを、お勧めになりましたのに、実にこの阿弥陀仏の本願による慈悲のみにふれられたからであります。そしてこの本願の救いをつたえるのが、釈尊の眞実のみ心であることをうけとられたからであります。

それでは一体この本願とは、どのようなことをいうのでしょうか。私たちは美しく咲き匂う花、清く研えわたった月を眺めますと強く心をうたれて、ただそれを美しいと思うだけでなく、やがてその美しさを自己の上にひきうつして、現実の自己の姿を反省し、自己の人生の歩みに思いを致すところまで、進むことでありましょう。自らを反省して、そこに自己のみにくい姿を見出した時、誰しもその現実の自己に満足することが出来ない筈であります。そこにはもっと美しい自己、もっと清らかな人生を求める願いが起ってくる筈であります。

私たちが現実の自己の姿をほんとうにみつめる時に、それがいがにみにくいものであるかを、知らされないわけにはゆかないのであります。しかしそれは同時に私たちが美しい自己を求めていることを示すものでもありましょう。美しい自己を求めるといことがなければ、自己をみにくしとする心が起るわけがないからであります。そしてこのことは私たちに美しい自己を求めるとの出来る根本になる美しいものが、心の中に本来そなわっていることを示すものでもありましょう。私たちが本来美しいものでなかったならば、決して美しさを求めるといような心の動きは、出てこないと思います。つまり私たちは現実の姿

を反省することによって、そのみにくさを知り、本来の美しさにたち帰ることを願う心をおこすのであります。

この現実の自己を本来の自己に帰そうという願いは、すべての人間のひとしく抱いている願いであり、人間である限りにおいて、誰もが本来もっている願いであると思えます。私たちはいま、うそいつわりのけがれた姿の中にあって、さまざまな悪い行いのために苦しみ悩んで、暗やみの世界におちこんでいますが、それだけにまことの清らかな姿になって、ただ善いことだけを行い、安らかな楽しい光明の世界に生きようとこい願ってやまないのであります。

しかし悲しいことには、私たちがこの願いを自らのものとして達成することは、極めて困難なことであります。私たちは長い間のまちがった行為、あやまった生活のために、その中につながれとざされて、それから脱れ去り、開放されることが、まことにむづかしいのであります。本来の自己に帰ろうという願いを抱きながら、現実の自己にしばられひきずられて、どうにもならないのが今の私たちの姿であります。

三

阿弥本仏は即ち法蔵比丘であつたその昔、この私たちの

心からの願い、すべての人間の本来の願いを、私たちに代り、すべての人間に代つて、その一身にお引受けになつて、これを自らの願いとしておこされたのであります。これが所謂「仏の本願」でありまして、その本願の中には、とりもなおさず私たちの人間としての願いが、すべてこめられ、あますところなくおさめ尽されているのであります。阿弥陀仏はそのみ心において、自らの願いを見とどけられただけではなく、あらゆる人々の願いを見おとされて、その本願を立てられたのでありまして、そこにはすべての人間の現実の姿を本来の願いとを、見とおし見つくす真実の智慧が動き、すべての人間の願いをかなえて、本来の姿にまでたち帰らさないではおかまいという、深い慈悲がはたらいているのであります。

「無量寿経」に説かれていますように、その本願は実に二百十億という数知れぬ国々について、そのみにくい悪い面を捨て去り、美しい善い面を選びとつて、立てられたのであります。このことは阿弥陀仏の本願が、一切の国土あらゆる人々を見とどけて、立てられたことを意味するのであります。その本願はまさしく一切の世界、一切の人間に及ぶものであり、しかもその中において、真に人間として実現すべき真実なものの最上のものを選びとつて、本願と

されたものであります。

しかし阿弥陀仏とても、その昔法蔵比丘であった時に、その願いをおこされるには、やはり世自在王如来のお導き、お力そえがなければならなかったのであります。世自在王如来のお力を蒙ることによって、初めて法蔵比丘はその本願をおこすことが出来たのであります。つまり法蔵比丘にみられる人間本来の願いは、人間だけでおこされたのではなくて、そこには仏の願いがこめられているのであります。仏の願いが人間の願いとして、仏の力によって人間の上におこされたのであります。ですからその願いは、人間をして仏にまで進め知らしめるものとなったのであります。

このようにして立てられた本願は、法蔵比丘が阿弥陀仏となり、極楽世界という浄土を構えられたところに、すべて達成されたのであります。ですからその仏の上に、その浄土の中に、人間としての願いもまたまちがひなく、すべて実現されているのであります。私たちが現実のみにくい自己に満足できないで、本来の美しい自己に帰ろうという願いを抱く限りにおいて、私たちは誰もがどうしても仏に帰依し、その浄土を願い求めないわけにはゆかないのであります。

しかもまた、仏はそのすぐれた智慧によって、私たちの願いを見とどけられ、深い慈悲によって私たちの願いを達成せしめようとされて、常にあらゆる人々に救いのみ手をさしのべられているのであります。私たちは自らの力だけでは、自らの願いを達成することがむづかしいではありませんが、幸いにこの仏の救いに預ることによって、必ず達成することが出来るのであります。仏の本願の力により、仏の浄土に救われますと、その浄土は即ち人間の願いの達成された世界であるからであります。

このように見てきますと、私たちが仏につながり、仏に救われるすじみちは、本願の中にしくまれていと言わなければなりません。阿弥陀仏が多くの人々の信仰をあつめた所以も、実はこの本願による仏と私たちとの深いつながりにあるのであります。そしてこの阿弥陀仏の本願とその救いとを明かに説きましたのが「無量寿経」であります。

会員各位にお願い

1. 会員五名以上で支部をご結成下さい。
2. 支部には、支部拡張用としてお申し込み次第、無料で見本「浄土」をお送りします。
3. 支部には、毎月「浄土」を一冊贈呈致します。

極 案

浄 土

▼前略御免下さい。過日は「信仰への導き」に添えて「葵ぐさ」までお送り下さいました。有難うございました。

私の家の宗旨は西山でしたが、一時キリスト教に走り、昨年まで聖書を唯一の聖典として信仰して参りましたが、上人の御法語を拝読する機会があり、お念仏の尊さを心から味う事が出来る様になりました。御会の浄土は毎月味読させて頂いております。御編集の都合もございましょうが、信仰相談とか質問欄など取上げて下さるなら願っています。

(京都・小浜道昭)

▼前略。「浄土」の購読注文致します。称念寺檀家で五名十二月号から来年十一月号まで一年分追加お願い致します。これで私を入れ十三名の浄土の愛読者となりました。

(静岡・藤田真乗)

▼いつも念仏門のために、皆々御活躍の段、慶賀の致りと存じます。(埼玉・深広寺)
▼世に母あるは幸なり、世に父あるも幸なり

(法句經)

法然上人は九才のとき、父の遺言「仇をうつな、怨を忘れて、みんなの救われる道を求めよ」が深く身にしみて、後年、度々「父の遺言忘れがたくして」と申された。そして遺言の、一切の救われる平和への道は、阿弥陀仏の、本願を信する念仏にあることを明らかにして、念仏一行を専修する身となられた。それは奇しくも父のなくなられた年齢と同じ四十三才の時であった。

上人、叡山に登られたのは十五才。その時、上人の母は別れをおしまれ、登山後度々手紙をよせられたが、これが生別であると共に、死別もかねていた。

上人、七十五才、四国流罪の時、瀬戸内海の小舟の中で、弟子湛空を手伝わせて、母より来た数々の手紙をはりながら、自像をつくられた。「ちと下りたまいて目えたまへ」との切なる願をこめた母よりの手紙のことなど、母上を偲ばれて念仏申して作られた。これは現在、張子の御影として、京都粟生、西山派本山光明寺にある。

上人の常に仰せられた「女人往生」のお言葉の中には、いつも母を偲ばれてのお心がふく

まれていたことと思われる。
アミダ仏の絶対大悲が、父母の慈愛をとおし
て感ぜられる人は幸である。

(愛知・藤井実応)

▼十二月号の特集は大へん参考になりました。
(東京・山田三夫)

▼新規会員を紹介致します。

(昭和三十七年十月以後・敬称略)

福岡	専念寺	山形	園部トヨ
福岡	榮長寺	大阪	上統祥隆
北海道	西迎寺	東京	正観寺
東京	雷田平蔵	東京	田原聖朗
東京	正法寺	東京	佐藤 間
神奈川	森きく	神奈川	大島泰雄
北海道	加藤芳明	東京	飯田重男
千葉	柴田敏雄	山形	浄徳寺
東京	川瀬法大郎	東京	須藤秀郎
香川	宮脇寿恵	静岡	渡辺春恵
神奈川	吉水瑞順	静岡	外山義一
静岡	田中政一	静岡	志田作次郎
神奈川	伊谷生三	静岡	山崎国生
神奈川	小峰キク	静岡	渡辺美雄
栃木	清厳寺	静岡	山崎晋平
福岡	宝典寺	大分	正木アイ

編集後記

▼正月気分もまだぬけきらぬうちに、もう二月になった。三日は節分。四日は立春と春に近づく。しかし今が一番寒い季節。

▼先月より始った須藤隆仙先生につづき、今月より、宗学研究所の香月乗光先生の『無量寿経』の話が始まった。入門的な阿先生の講話に注目していただきたい。

▼教育シリーズの岡本信教先生は福岡県鞍手郡の精薄教育部長で、教職のかたわら日曜などでは自坊のお手伝をして活躍しています。

▼扉の写真に説明がない。しいて解説をつけなかったのですが、正月号は九州国東半島の光明寺で、今月は千葉房州の神野寺の庭。

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七〇〇円
送料二〇〇円

若き人びとにおける仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町一ノ二二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一カ年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 二月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十八年一月廿五日 印刷

昭和三十八年二月一日 発行

定価 五十円

編集人 佐藤 密雄

発行人

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京千代田区飯田町一ノ二二

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京三三二五五九四番
振替東京八二一八七番

大正大学

学長 青木道晃 東京都豊島区西巢鴨四丁目

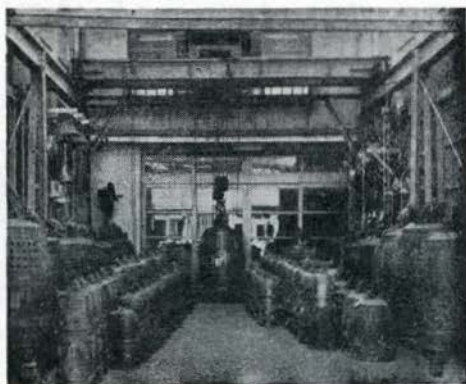
- 特色
1. 西と東、右と左の中道を行く仏教精神が本学建学の基礎である。従って、穏健中正、操守高き学生を育成する事を目標とし、教授凡てが身を以て指導している。
 2. 学生は、入学と同時に専攻別による13の研究室に所属して夫々の教授から指導を受けるほか、研究室の豊富な蔵書を利用して勉強できる。

専攻

文学部＝国文学、英文学、史学、西洋哲学、宗教学
中国学、社会学、社会事業の8専攻
仏教学部＝仏教学、梵文学、天台学、真言学、浄土学の5専攻
大学院＝修士コース、博士コース（仏教学、宗教学、国文学）

昭和38年度1年の募集人員は200名、試験科目は、国語（漢文をふくむ）社会、外国語（英、独、仏のうち一つ）

試験期日 第1次 2月27日・28日（水・木） 詳細は入学案内
第2次 3月27日・28日（水・木） を参照のこと



鑄物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

梵鐘（45cm～85cm）
在 庫 豊 富
音 響 理 学 博 士 青 木 一 郎 先 生
喚 鐘（12cm～51cm）
梵鐘界の権威 日展 参事 香取正彦先生
芸術院賞受賞

株式会社 老子製作所 大阪支店
電話大阪 04 8847番 本社工場 高岡市横田